

第2回中国大学図書館担当者訪日交流感想文

招聘期間：2002年10月22日～10月31日

団長 黒龍江大学 教授 霍 燦如

団員 清華大学 図書館 馬 雪梅

団員 大連外国語学院 図書館電子教育館 劉 日昇

団員 中国国際友好連絡会 亜細亜部 馬 農

中国大学図書館担当者第2回訪日団視察報告書

中国大学図書館担当者第2回訪日団団長

黒竜江大学教授 霍 燦如

日本財団の助成と日本科学協会の招請により、そして中国国際友好連絡会と教育部国際交流司の指導下に「第2回中国大学図書館担当者訪日団」一行12人は、2002年10月22日～10月31日まで日本を訪問し、日本各界の方々と交流を行った。中国国際友好連絡会と教育部国際交流司の大いなる支持と協力を受け、なお事前に日本科学協会の細心な日程設定と周到な手配により、各訪問先での訪問日程が順調に完了した。訪問先々で訪日団は、日本各界から熱烈な歓迎と心を込めた接待を受けた。中日双方は友好交流を行い、交流の効果を重視した訪日は円満に成功した。日本国民は礼儀正しく、友好的に訪日団を受け入れてくれた。訪日を通じて日本の科学技術、歴史、文化、都市と農村の風貌、風俗人情等を理解し、受益が多かった。今回の訪日交流は訪日団全員にとって忘れがたい思い出となった。訪日交流は、「教育・研究図書有効活用プロジェクト」を促進しただけではなく、相互理解と友好促進の効果も実られた。これらは、中国大学図書館の今後の国際交流のための礎になるものである。今回の訪日は中日国交正常化30周年の節目に実施したもので中日友好の雰囲気が一層濃いものにした。

1. 訪日視察の概略

(1) 日本科学協会、日本財団の最高責任者への表敬訪問

訪日団の視察と交流の全日程において、終始、日本科学協会と日本財団の最高責任者の方々から心を込めたご配慮とご招待を受けた。日本科学協会理事長濱田隆士、常務理事梶原と福山、日本財団理事長笹川陽平、常務理事森田は訪日団全員と親しく会見し、双方は友好的な会談を行った。笹川陽平理事長は多忙にもかかわらず、訪日団全員と会見された。会見中に笹川陽平理事長は、鄧小平氏と一緒にとった記念写真を見せてくれた。笹川陽平理事長は、中日両国は友好な隣国にならなければならない。日本財団が日本各界から図書を収集して中国大学の図書館への寄贈事業を助成する目的は、中日間の民間交流と図書に関する情報の提供を通じて、更に中日間の友好関係と中日両国の発展を促進するところにあると語られた。会見後に笹川陽平理事長は、訪日団全員と記念撮影をされた。濱田理事長は素敵な笑顔で訪日団のために歓迎宴を設けてくれた。歓迎宴の交流の中で、濱田理事長は、日本科学協会の宗旨を紹介してくれた。日本科学協会は、日本国内と海外の科学技術者間の友好協力の促進、科学教育と一般文化の発展、世界平和への貢献を目的にして、さまざまな活動を行っている。日本科学協会は、日本財団の全面的援助の下で事業を展開している。1999年7月に「教育研究用図書の有効利用事業」を立ち上げて以来、日本科学協会の年間予算5.7億円の中から1.2億円を「教育・研究図書有効活用

プロジェクト」のために支出することは、本事業に対する日本財団の重視を十分に伺わせた。今日まで、中国の各大学に延べ40万冊の和文図書を寄贈した。日本科学協会と日本財団の最高責任者の方々が今回の訪日交流の成果を期待している気持ちは同じである。すなわち、文化交流を通じて中日両国間の相互理解と友好関係の増進を促進し、図書の寄贈をきっかけに人員の交流へと発展していく。訪日団全員に各角度から日本の文化を理解してもらい、友好を促進しようと語られた。訪日団団長教授霍燦如は訪日団全員を代表して、日本科学協会と日本財団の最高責任者の会見に対して感謝の意を表した。そして中国10大学のすべての読者の名義を借りて日本科学協会と日本財団から寄贈された「精神的食糧」に対して感謝の意を表した。「教育・研究図書有効活用プロジェクト」の「国大学図書館担当者訪日団」訪日は、図書館界の同業者達と対面に交流することができた。日本の先進的経験を学ぶことを通じて、必ず、日本文化に対する理解が深め、相互理解の増進と中日友好の促進に良い道を開拓したと語られた。

(2) 図書館学と情報学に関するセミナーと交流

セミナーの主題は、中国側が「中国大学図書情報利用リテラシーの方向」にし、日本側が「日本著作権法の実施について」にしていた。参加者は中日の大学関係者、図書寄贈事業の協力者、科学技術、文化等各界の方々があった。濱田理事長は開会の挨拶をされた。訪日団団長霍燦如教授が「中国大学情報利用リテラシー教育の発展状況」について紹介した。日本著作権協会中川舞弓は、「日本著作権法の内容及び法律実施中の問題点と対策」についての詳細を紹介して参加者各位の興味を集めた。参加者からもいくつかの問題点に対してそれぞれの意見を発表した。日本科学協会常務理事福山は、閉会の挨拶をなされ、セミナーが閉会した。

(3) 図書館界との交流

中国大学図書館担当者訪日団は、日本滞在中に早稲田大学図書館、京都図書館、国立国会図書館関西館、大阪市立図書館を見学した。訪日団全員は、各館の紹介を聞き、館舎と各部署の業務内容を視察した。見学先で担当者との間に業務の交流を行った(詳細は後述の訪日内容のまとめを参照されたい)。

(4) 日本の自然、社会、歴史、文化との触れ合い

訪日団は、丸善社、富士通社、箱根美術館、大寿庄温泉、大涌谷、清水寺、東大寺、金閣寺、大阪ユニバーサルを見学し、新幹線に乗りながら沿路の風景を見物した。そして皇居、銀座に足を運び、和食を楽しんだ。また大自然の賜りものの温泉に浸かり、火山の噴煙と富士山の奇観を見た。日本舞踊を観賞し、カラオケのメロディーに陶醉した。泊まったホテルの窓から東京、大阪の「万家灯火」という華やかな夜景を鳥瞰した。訪日団は訪問しながら歌い、日本滞在中の愉快な心情を歌で表現した。更に一衣帯水の隣国日本を訪問する雰囲気輝きに輝きを増やし、日本の民族及び風土人情をより一層理解した。

2. 訪日団の収穫と感想

中日友好の歴史が古い。敬愛する周恩来総理から、改革開放の総設計師の鄧小平まで、中日友好関係の構築について非常に重視していた。江沢民総書記も中日友好に関して多くの指示をした。歴史的には戦争の傷と怨恨があるが、これらは忘れることのない歴史教訓である。これらは美しい未来を開拓するための激励になければならない。日本財団と日本科学協会が中国大学への図書寄贈事業は義挙である。中国流に言わせれば、善事であり、善事は報いられる。このこと自身は中日友好の歴史の続編を書き続けることであり、意義が重大で、影響が深遠になる。日本科学協会は、中日の科学者を連結する架け橋と絆である。大学は科学者を育成する揺りかごである。中国の大学へ教育研究用図書の寄贈は、間違いなく科学者の育成における重要な内容である。学術研究セミナー、図書館館員の交流、図書館の視察は、日本の社会、文化等に対する実地考察である。まさに中国大学図書館が期待していたところである。第2回の訪日は以前より成熟し、実在の意義を持つものである。

(1) 相互理解と友好往来の促進

今回の訪日の最大な収穫は、相互理解と友好往来を促進したことである。日本科学協会と日本財団が一同になって協力しあい、中国大学への図書寄贈という民間交流事業を通じて、中日友好関係の発展を促進させること自体は一種の発明と創造である。それは世界平和と発展を促進する過程において、大きな促進力となる。日本科学協会と日本財団のスタッフが仕事面において細心周到で、謹慎な仕事の態度、礼儀正しく情熱を込めて仕事する作風を通じて、訪日団全員は中日両国民間の友情をしみじみに感受された。日本滞在期間に、平和と進歩、平和と発展が当今世界の流れの本流だと深く認識させられた。日本各界の方々との交流を通じて日本国民の友好、善良の本質を感受し、中日両国の世代代の友好の前途に自信を持つようになった。

(2) 「読者本位」という図書館サービスの理念の具現

①. 国立国会図書館関西館

国立国会図書館関西館は、1982年から企画して2002年4月に竣工した。2002年10月に正式に開館した。建築面積は5万9500平米で、図書の収納能力は600万冊である。建物は丁字型の建築で、地上4階と地下4階の8階建てである。地上部分は、外壁がタフンドガラス張りで、正面の広場は階段式の芝生があるが、地下の換気部分にもなっている。換気装置は芝生で綺麗に飾られている。丁字型の廊下を通り抜けて、地上1階のホールに入る。読者は、画面を操作し、自分の図書カードの情報を入力して入館でき、館内を自由に回れる。明るく、広々とした各閲覧室の面積が4500平米であり、壁際に本棚と読者閲覧エリアがあり、中間の本棚は比較的に低めに設置している。通路側にパソコンの設置により通路と閲覧、本棚と隔離した。カウンターにノートパソコンを置い

であり、読者が自由に利用し、検索できる。室内の環境は非常に居心地がよく、清潔で優雅である。地下1階の書庫には、一部が移動書庫になっており、一部が開架の図書が置いてある。移動書庫エリアに人感センサー内蔵照明が設置しており、人が入るとセンサーが感知し、自動に点灯し、無人時に自動に消灯する。開架本棚は、鉄製で、6層がある。中間に穴が開けられ、本の大きさに応じて板を挿入することができる。このようなやり方は中国にはあまり見られない。案内役の田中さんは、キーカードを手に、ドアサイドの確認装置に挿入してドアが自動に開けてくれる。各ドアにこのような自動開閉装置が設置されている。廊下全体は明快さを感じる。壁は白く、床はダウブルー、しかも滑り止め材料を使っている。図書館にはアジア情報室があり、中文図書が4万種類ある。

②. 京都大学図書館

京都大学図書館長は、自ら図書館の状況を紹介し、中国と更に交流したい意向を説明した。京都大学図書館の蔵書は80万冊があり、大学全体の蔵書は600万冊がある。4000種類近くのジャーナルがあり、摘要、或いは目録という形でパソコンで検索できるようにしている。

③. 早稲田大学図書館

早稲田大学は設立以来100年以上の歴史があり、日本最古の大学の一つである。われわれはここで古籍閲覧室を見学した。古籍閲覧室には孫文(中山)と康有為の親書がある。古籍蔵書は30万冊がある。中国語を話せる女性館員が案内してくれた。明るく、広々とした閲覧室にはそれぞれ休憩室があり、ソファは早稲田大学の英文頭文字の「W」型に置いてある。図書館内の国際フォーラムホールに国際化のセミナーが開催中であった。1階の読者サービスエリアには、コーヒーショップと読者休憩所がある。コーヒーショップは学生達が管理し、値段が安い。早稲田大学図書館には研究室も数多く設けられ、個室になっている。中にはテーブル、パソコンが置いてあり、非常に居心地良さようである。日本大学図書館員は、職務等級の評定がないが、行政スタッフ別に、館長、部長、課長といった肩書きになっている。しかしスタッフは資格試験を経た有資格者が従事しなければならない。

④. 大阪府立図書館(公共図書館)

館長が自ら図書館の状況を説明してくれた後に、担当課長は館内を案内してくれた。第一の印象としては、入り口で見学者というネームプレートを受け取り、胸に付けて館内に入る。見学後にネームプレートを返却する。この方法には、二つのメリットがある。一つは入館者人数が統計しやすい。二つ目は、見学者が識別しやすい。第二の印象としては、読者本位のサービスのことである。すべてが読者のためである。図書館への道にはバリアフリーになっており、目の不自由の方がわかりやすいようにしている。図書館の入り口に目の不自由の方のための点字案内板がある。身障者が自分でできない部分は、スタッフがすぐに駆けつけてくれる。図書館内に点字閲覧室があり、パソコンを利用して発声閲覧と音声読書を通じて閲覧している。視聴閲覧室には録音テープ12000があり、CDが1000枚ある。すべてが自由に利用できる。図書館のいたるところでインターネットを通じて図書

と各地においてある文献と資料が検索できる。図書館の図書貸出用コンベヤーも非常に進んでいる。日本の大きい図書館にはほとんどこのような貸出コンベヤーが設置されている。貸出カウンターは Fax で地下一階の書庫に通知し、貸出図書はコンベヤーが貸出カウンターまで運んでいく。図書の返却は自動である。地下 1 階の書庫にスタッフ達が自転車で本を探し、運んでいる。大阪市立図書館には児童図書館がある。子供達は母親に連れられて図書館で玩具を遊び、さまざまな実物を見ることができる。これらの実物と玩具はすべてボランティア達が寄付したものである。図書館には年寄りのために大文字の閲覧室を設けてある。総じて図書館のすべての仕事は読者の需要への配慮から始まる。日本のすべての公共図書館には写真撮影は禁止されるが、大学の図書館は撮影可能である。しかし、肖像権の侵害を理由に読者への撮影は禁止される。図書館の目立つ場所には、携帯電話の使用禁止、撮影禁止等の掲示板が掲げられている。大阪市立図書館の 1 階書庫は面積が広く、5000 平米ある。読者が探しやすいため、本棚は本の種類別に色で分けられ、出口の浅色から奥の濃色の順に陳列している。

(3) ハイテクと環境保護は世界一流

富士通株式会社は、世界の主導地位にある日本のハイテク・ミニテクを示した。富士通社のショールームは、会社発展の歴史を展示している。日本が設計した一台目のコンピュータから、現代の最新のコンピュータまでの順に陳列し、見学者の目を繚乱させる。日本自動車産業は世界をリードする技術を誇っている。道路に走っている日本の各自動車メーカーのさまざまなブランド車が見える。10 日間の日本滞在に、訪日団の行程は千里(500 キロ)を超え、沿路で感受していたのは、新鮮な空気、青い空、青々しい樹木、茂る植生である。ハイテクによる環境保護を行い、東京、京都はほとんど汚染されていない。大自然の賜りの理由以外に、重要なのは人々が自然環境を保護する意識が強いところにある。この点については中国の国民が見習うべきである。

(4) 普通の国民生活を体験した

大寿庄温泉保養所で、各地からきた年配者が見かけた。山奥の林の中にあるこの保養所は、空気が格段に新鮮であるのに加えて温泉があり、まさに療養の聖地である。日本の年配者達は、このようなところにこられる自体は生活の余裕がある証である。夜になると、大自然の賜りものの温泉に浸かり、美食と美酒を楽しむことはこの上ない喜びである。訪日団は日本人のカラオケの魅力をこの身をもって感受した。日本の年配者達の民間舞踊の扇子舞踊と社交ダンスは非常に上手で羨ましい限りである。未来を展望して更に希望に満ちると感じた。時の流れは矢の如し、訪日はあっという間に終わり、帰りを忘れるほど親しさを感じた日本を離れた。滞在期間が短かったにもかかわらず、築いた友情は忘れられない。中日間の友好関係は固めていかなければならない。「来ることあれば、行かずに無礼なり」という言葉のように、日本友人の中国訪問を心待ち、中日間の交流を末永く続けていきたい。中日両国の友好関係は、世界とアジアの安定に一挙手一投足の役割がある。訪日団は図書館事業の視点から教育図書の有効利用には十分に自信を持っている。中国の大学に日本語学科の開設、大学生と教員が和文資料に対する需要が見えるものである。問

題は、随時にそれぞれの読者の需要にいかに応えることである。特に今日の情報社会には、情報自体は知識であり、知識自体は財産である。情報の特徴の一つとして迅速に即時に取得することである。文献情報資源が世界共通の富だということは訪日団一同の共通の認識である。図書館のネットワーク化、デジタル化の進展は世界範囲の資源共有について明るい未来像を示している。中国の大学は対日交流の先鋭として未来に対して十分に自信を持っている。われわれは、より一層手をつないで一緒に美しい未来を切り開こうではないか。

第二回中国図書館担当者訪日団訪日視察総括

清華大学図書館 馬 雪梅

財団法人日本科学協会の招請を受けて、「第二回中国大学図書館担当者訪日団」は、2002年10月22日から31日まで、東京を始めとする日本各地を訪問した。清華大学の代表として今回の訪日団に加わった。日本側の周到な手配により、既定の日程を順調に終えた。今回の訪日は、中日双方担当者の相互理解と友情を増進した。

財団法人日本科学協会は、1999年に「教育研究用図書の有効利用事業」を打ち出し、実施し始めた。中国の10大学を選定して寄贈対象としている。事業スタートして三年来、寄贈図書はすでに40万冊を超えた。中国大学図書館担当者訪日団を招請することは「教育研究用図書の有効利用事業」の一環である。その目的は、中国図書館担当者に「教育研究用図書の有効利用事業」の組織方法、実施状況を理解してもらい、双方の交流を強化することにより同事業の推進に役立つところがあり、実地考察により、中国図書館担当者に日本図書館界の発展と変化、日本の社会文化の内在的な特徴、日本国民が友情を大切にして世々代々に友好を願う真摯的な気持ちを理解してもらい機会を提供するところにある。

日本滞在期間中に、訪日団の主な日程は、日本財団と日本科学協会の最高責任者に対する表敬訪問、「図書館情報利用リテラシーセミナー」の出席、図書館(公共図書館と大学図書館の4館)見学、関連の科学技術開発機関と文化研究機関の視察、文化旧跡、自然景色の見学などが含まれる。

1. 視察についてのまとめ

(1) 図書寄贈事業と中日間の民間交流

事業の参加者として、仕事を通じて日本科学協会の「教育研究用図書の有効利用事業」についてより多く理解していると思っていたが、今回の訪問を通じて訪日団の一人一人は「教育研究用図書の有効利用事業」のより深層の意義についてより深く理解できた。

まず、日本財団、日本科学協会は、科学教育と一般文化の発展、世界平和の促進に力を入れている。日本財団と日本科学協会共々、「教育研究用図書の有効利用事業」を重視し、企画から実施まで多くの人力を投入している。図書の収集、整理、配送等のプロセスにおいて、数々の困難を克服した。事業の実施過程においても、日本図書館界、出版社、文化界等の各界からの支援が得られた。このように、図書寄贈事業は絆になって異なる集団、異なる社会団体を繋いで、中日友好の発展を応援する各界の人々の感情と力を融合したものとなった。

その次、今回の訪日を通じて、われわれも中日両国の友情を構築する一人のメンバーになったと実感した。日本財団笹川陽平理事長は、多忙にもかかわらず、自ら訪日団と会見し、歓迎パーティーを主催した。出席者一同は、笹川良一先生の「60才を減らす気持ち」で日中友好事業への情熱を注いだ崇高な精神を改めて教わられた。笹川陽平先生は、「隣国と友好に付き合っていくことは、みんなで共同に努力しなければならない事業である。図書寄贈事業は続けることこそ貴重であり、意義が深いことである。日本財団はさまざまな協力を通じて中国の経済発展を支援していく。」と心を込めて挨拶された。図書寄贈事業の参与者として、われわれは、改めて個人の努力により二つの民族間の交流とコミュニケーションも促進できると痛感した。

2. 日本図書館のデジタル化(電子図書館)についての研究

訪日日程に、「図書館情報利用リテラシーセミナー」と大学図書館視察の二つの内容は、日本のデジタル図書館(電子図書館)研究のフレームワークを示してくれた。今後の図書館建設の大きな参考になる。デジタル図書館の研究と建設は、当今世界のホットピックスであり、デジタル著作物の著作権からソースのデジタル化技術案まで、テーマの選定と実験からサービスの提供まで、各国の同業者間の交流はとても必要であり、貴重である。「著作権研究報告」セミナーと、富士通社の「日本電子図書の発展概要」、並びに京都大学の電子資源サービスに関する説明等は、訪日中において情報量の最も豊富な日程であり、訪日団全員の興味を高めた。著作権に関する日本側の基本的考え方と管理方法を理解した。京都大学図書館等の図書館が資源のデジタル化について一定の成果を収めた。これらの情報は、当図書館の良い参考になると思う。時間の関係で、訪日団は、日本の同業者に中国のデジタル図書館に関する研究を紹介することができなかった。たとえば清華大学図書館、上海図書館等は、元データ研究についての実験等を紹介する機会がなかった。その他に法律範囲内にデジタル図書サービスの提供も注目の焦点であるがセミナーでは展開できなかった。

3. 日本図書館の先進な設備と科学的管理並びに読者優位の理念

中国に比べて日本の大学図書館でも公共図書館でも比較的充足な予算が確保できている。これは、文献資料の購入能力に反映されただけではなく、図書館の容積と先進的な設備にも反映される。われわれが視察したいくつかの図書館は例外なく、広い閲覧の空間と整備された検索端末があり、中国の読者(公共閲覧空間)と図書(書庫)が空間を争う窮状とは鮮明な対比となっている。

早稲田大学図書館、大阪府立中央図書館の移動書庫、無人書庫、及びこれらの書庫の管理シ

システム等は、中国の図書館の利用率の低い蔵書の管理の参考となった。このほかに、各図書館の書庫には、換気装置、音声警報装置、消防装置が合理的に配置している。消防装置には、煙警報機以外に、CO₂ 燃焼遮断システムがあり、通路には簡明な取り扱い方法を明記する緊急用消火器が備えている。

図書館の利用率の低い蔵書を業者に保管を委託することは日本においては普通の方法であるが、中国国内にはまだこの方法を利用されていない。「教育研究用図書の有効利用事業」の図書の保管、整理、配送を担当する丸善社の配送センターはこの保管業務のモデルを示してくれた。

その他の先進国と地域と同様に、日本の公共図書館はすでに成熟したシステムとなっている。大阪府の例では、800 万人口の都市には、府立図書館が 2 館あり、中央図書館は所属の 44 の図書館に対して技術的サポートを提供している。大阪は、144 の公共図書館がある。これらの図書館は、地域に文化サービスを提供する機能を有している。地域住民が近距離で、短い時間内に必要とする文献を入手することができる。大阪府立図書館は、一部のデジタルサービスとネットサービスを提供している。館内図書の電子検索システムは構築中である。社会的信用システムを利用して、公共図書館の図書カード申請手続きは非常に簡単で、セルフサービスによる製作のところもある。公共図書館のサービス対象は範囲が非常に広いにもかかわらず、幼児と身障者等の需要にも特別に配慮している。公共図書館は文献サービスの提供と大衆の文化的素養の育成の両面において重要な役割を果たしている。

図書館の視察において、もう一つの鮮明的印象としては、隅々まで貫く読者への配慮である。たとえば、消音処理を施したジャーナル棚、和英中韓等外国文字で編集された小冊子等、各図書館のバリアフリー通路、音声表示装置、目の不自由の方のための文献閲覧器等である。図書館館員は、読者への尊重と配慮により、閲覧中の読者に見学者が影響しないように、見学者の撮影と録画を合理的に禁止する。「読者優位」という理念はまさに具現されている。

4. 日本の文化を感受する

訪日中に、訪問先々で訪日団は熱烈な歓迎を受けた。簡単な交流の中で、日本国民の友情と誠意を感じた。そして限られた体験の中で、仕事に対する日本国民の厳しさと細緻の作風を感じた。

早稲田大学図書館を見学した際に、「特別蔵書部」は、私達のためにわざわざ中国の古籍書を用意してくれた。これによって本来慣例の業務交流は親しい雰囲気にも包まれた。丸善社の発送センターを見学した時、従業員全員が列を並んで中文で書かれた歓迎プレートを掲げ、出迎えてくれた。一瞬、双方の距離を縮めた。丸善社の配送センターの各プロセスは秩序があり、建物が古く、蔵書が多いが、まったく混乱が見られなかった。特に配送後に残されたジャーナルをきちんと棚に並べており、偶然にどこかの図書館の補充用に用意している。

京都滞在は一日しかないが、金閣寺等の見学ができた。京都市区の古風な町並みを満喫した。京都滞在は短かったにもかかわらず、古跡を大事に保存され、日本政府が古文化に対する重視を感銘したと共に、無意識に歴史遺跡を破壊し続けている中国のことを心痛い思いをした。

日本を離れる前日、訪日団は、大阪ユニバーサルを見学することになった。現代的科学技術の手段を借りて当今の東側と西側の文化交流を更に写實的、直接に映り、隠れ味がある。特に視聴作品の影響力は、テレビと映画館の範囲を遙かに超えた。ユニバーサルの入場者の大多数は小学生である。ハイテクが作りあげた独特な雰囲気を楽しみ、映画背後の技術を理解し、童話世界を改めて感受することは間違いなく、ユニバーサルの入場者の最大な収穫である。しかし、われわれ素人の視角から考えれば、アメリカ文化が他国への影響を無視できないと思った。中国に対しても日本に対しても同じことである。

2. 今後の訪日交流について個人の提案

財団法人日本科学協会が中国図書館担当者訪日団の招請に対して非常に感謝している。個人の感想と仕事の角度から以下のように提案して今後の参考に供したい。

(1) 学術的交流の内容を維持し、高めていく。

訪日団招請は、図書寄贈事業の一環であり、双方担当者のコミュニケーションと理解の強化と、中日図書館員、あるいは技術者の間に交流の機会を作ることは目的である。提案としては、毎回の訪日団を一つの主題を中心に日程を組むほうが良い。セミナーとその後の2~3の日程を同じ主題を中心に行う。たとえば2002年の第二回訪日団は、主題が「図書館のデジタル化」とすれば、重要日程はセミナー(デジタル著作権)と報告会(富士通社の技術報告)等である。その他の視察日程には一般見学以外に適当に主題と関連する内容を手配してほしい。たとえば、図書館情報サービスなどの紹介を中心にする。主題が決めれば、事前に参加者にその旨を通知する。可能であれば、中国側の代表に主題と関連する報告をしてもらう。一定の学術的レベルを維持すれば、この事業の影響度が広がる。

(2) 日本科学協会から毎年、訪日主題を各大学の図書館に通達し、大学側はそれにあわせて参加者を選定して、事前に本大学の交流用資料を用意する。

(3) 図書館視察の内容を簡略して、各図書館の特徴を中心に交流の重点とする。適当にセミナーの交流時間を増やす。

図書館業務は、膨大なシステムであり、館舎の管理からシステムの運営で、読者へのサービスから資源の構成まで、各テーマも独立な交流テーマになる。短時間内に日本図書館の最新発展、ホットピックス、新技術等の二、三を理解してもうれしい。

(4) 受贈対象の10大学間の交流を適当に増やして欲しい。たとえば図書の後期管理、書目の編集、サービスなどをテーマにする。定期的に各館の文献需要及びその需要の変化に関する情報を収集する。年度業務報告という形で、中日双方の事業関係者間の交流を行い、受贈大学間の情報共有を図る。

2002年12月12日

訪日感想

大連外国語学院図書電子教育館 劉 日昇

成熟の息を嗅わせる収穫の季節を迎え、紅葉で彩る秋の季節の十月に、そして中日国交正常化30周年の節目に、大連外国語学院図書電子教育館の代表として、日本財団と日本科学協会の招請を受け、「第二回中国大学図書館担当者訪日団」に加わり、日本を訪問した。10日間の短い滞在期間に、早稲田大学図書館、京都大学図書館、国立国会図書館関西館、大阪府立中央図書館、富士通社、丸善社、及び大阪府立農林技術研究所等を視察し、「図書館情報リテラシーセミナー」に出席した。「図書館情報利用リテラシーセミナー」において、中国と日本の専門家達は、中国大学図書館情報利用リテラシーと日本電子出版物の著作権保護法等について幅広い交流と研究を行った。そして日本滞在中、東京、箱根、京都、奈良、大阪等を見てまわり、日本の歴史、文化、科学技術、都市と農村の風貌、風土人情を満喫した。今回の訪問を通じてたくさんのものが勉強して受益が多く、実り豊かな訪日となった。

日本滞在中に日本財団と日本科学協会の責任者は、訪日団全員を心から受け入れ、親切に会見してくれた。日本財団笹川陽平理事長、森田文憲常務理事、鈴木浩司部長、佐藤英夫課長、日本科学協会濱田理事長、梶原義明、福山征士常務理事、顧文君課長等の方々は、訪日団全員と会見し、双方は、親しく、友好的な会談を行った。そして日本駐在中国大使館文化参事官も訪日団全員と会見し、親しさを感じた。

日本を代表する各種の図書館を視察することは、訪日団全員の一番興味深い日程であった。早稲田大学図書館を見学した際に、図書館の面積、施設、文献の予算、業務の流れ、デジタルデータ化サービス、コンサルタント、資源の共有等を視察の重点に置いた。中日の大学図書館の間には多くの共通点と比較可能な部分がある。交流を通じて共通点と相違点を見つけて長短を取捨して共にレベルアップすることができる。国立国会図書館関西館と大阪府立中央図書館を見学した際に、われわれは、館舎の現代的設計とインテリアデザイン、読者へのサービス、特に身障者のための特別サービス、文献のデジタル化、コンピュータ管理、ネット資源の共有等を重点的に視察した。これらの図書館を見学して総合的な印象としては、館舎のデザイン、面積、コンピュータ等の設備、閲覧用のデスクと椅子、本棚等を含む日本の図書館のハードの部分は、明らかに中国の大学図書館より優れている。そして文献の経費については、比較できないほど日本のほうが充足している。日本大学図書館の場合、蔵書にしたい図書がすべて購入できる。そしてサービス面においては、中国大学図書館とは大きな差がない。但し、文献のデジタル化、ネットサービスにおいては、日本のほうは著作権等の制約があり、比較的遅れている。それに対して近年来、中国は文献のデジタル化のテンポが日本より進んでいる。しかし、欧米の先進国に比べれば、文献のデジタル化とIT技術の応用等に関しては、中国と日本の図書館がそれぞれ一定の差がある。中国にとってサービスと読者優位の理念において、日本の図書館同業者に学ばなければならない。

訪日団は、寄贈事業を携わっている丸善社を訪問した際に、丸善社従業員全員は、列を並んで玄関まで出迎えと見送り、心を込めた歓迎を受けて、訪日団全員は深く感動した。富士通社を訪問した際に、富士通社は、周到な手配、行き届いた準備、適切のご紹介、エレベータまで周到的なサービスを受けて、遠路から来たわれわれは、世界的ブランドとしての富士通社の製品以外に、仕事に対する慎み深い作風と科学的管理体制についても感銘した。大阪府立農林技術研究所を見学した際に、日本政府が生態農業に対する重視を感じた。大阪府立農林技術研究所は、梅酒の酒粕を牛の飼料として使い、果物の優良品種導入、野菜品種の育成等について大量の研究を行った。中には、「園芸と障害者のリハビリ事業」についての研究において、われわれは改めて日本政府が隅々まで身障者を配慮する姿勢に感銘を受けた。

周囲に海に囲まれる美しい島国の日本は、広い太平洋の西北にあり、中国とは一衣帯水の隣国である。北海道、本州、四国、九州の四つの大きい島と3500位の小さい島々からなる。東北から西南まで細長く延びている。風景は秀麗で、植生被覆率が高く、空気が清新であり、都会も繁華である。雪に覆われる富士山；青波を打つ琵琶湖；繁華な現代化大都会東京；長閑な千年古都京都；日本古代文化発祥の地の奈良；茶道、文楽、歌舞等日本古代文化発祥の地の大阪……、世界にその名を馳せて、訪日団員が帰りを忘れるほど気をとられた。

日本財団と日本科学協会は、中日の民間科学文化交流を通じて中日友好関係の発展を促進し、世界平和と世界文化交流という偉大な事業に携わっている。日本科学協会は1999年から「教育研究図書の有効利用事業」を実施し、中国の大学に図書を寄贈しはじめた。2002年10月現在、すでに40万冊を収集し、そのうちの30万冊を中国に発送した。大連外国語学院は4万冊を受贈した。これらの図書は、大学図書館の日本文蔵書を豊富にしたと同時に、教員と学生達がこれらの受贈図書から科学技術、文化知識、情報を吸収して日本文化に対する理解を深めたことにも積極的な役割を果たしている。

大連外国語学院は、中国東北地区における唯一の外国語専門大学であり、現在世界においても日本本国以外に、規模最大の日本語教育と日本語訓練の基地である。日本語教育は、遼寧省の重点学科として扱われている。現在、四年制と五年制の日本語専攻学部、日本留学予備生日本語トレーニング、通信制大学日本語学科、成人教育日本語学科、日本語会話聴力強化コース等がある。教員レベルが高い。そして学院内に、日本文化研究センター、中日比較言語研究所、日本語教育研究所、日本語応用言語研究所、日本詩歌研究センター等の研究機関もある。現在、学院は、「日本文化の村」の建設に力を入れている。「日本文化の村」は、日本語教育、研究、日本文化の展示、交流、社会に日本の茶道、娯楽、飲食文化、相撲、野球、花道、図書、映画等の宣伝と推進を通じて中国の国民に日本の歴史、文化、科学技術、並びに風土人情を理解してもらい、それによって中日友好を増進することを目的としている。

この度の訪日において、訪日団は、日本の図書館を視察し、日本図書館界の友人達と対面の交流ができた。「理解が交流から始まり、交流はり会を増進する」といわれるように、中日両国民の友情を常しえに、そして日本財団と日本科学協会の事業は、絶えず発展するように心から願う。

「第2回中国大学図書館担当者訪日団」報告書

日本科学協会の招聘で、当会の組織による「第2回中国大学図書館担当者訪日団」一行12名は2002年10月22日から10月31日まで日本を訪問した。当会の積極的な協力及び日本科学協会の周到なご手配のもとに、訪日団の実施は順調で、日本の各団体からの熱烈な歓迎と接待を受けた。中日双方は実務的で、心開いた交流を行い、図書寄贈プロジェクトに対する認識が一層深められ、中国の大学図書館と日本の関係者との交流・協力が強化された。収穫が大きく、円満に成功裡に終わった。

一、 訪日概要

代表団は日本の滞在の期間で、日本財団の笹川陽平理事長、森田文憲常務理事、日本科学協会の濱田隆士理事長、福山征士常務理事、梶原義明常務理事を表敬し、日本の早稲田大学の図書館、京都大学の図書館、国立国会図書館関西館、大阪府立中央図書館、富士通の図書館、丸善(株)等を視察した。東京滞在中、代表団と日本科学協会が共同で「日中図書館情報リテラシー研究会」を開催した。

二、 訪日の具体的な内容

(一) 日本財団と日本科学協会の主要リーダーへの表敬訪問

代表団が日本財団を表敬訪問する際、笹川陽平理事長は次のことを表した。代表団が中日国交正常化 30 周年にあたり日本にいらっしゃることを歓迎し、中日両国は近隣なので、両国間の友好関係を保つのは非常に重要な意義がある。日本財団が実施している図書寄贈プロジェクトは中国側の各関係者の大きな支持と協力により、順調に進んでおり、図書の寄贈により中日両国の教育交流を強化することができる。大学側の率直な意見を聞き、できるだけ中国側の要望を満たし、図書寄贈プロジェクトを改善したい。中国がWTOに加盟した後、近代化の建設の中では外国の図書、情報に対するニーズが益々高くなり、日本側がこの面では協力したい。

日本科学協会の濱田隆士理事長、福山征士常務理事、梶原義明常務理事を表敬訪問した際、次のことを表した。日本科学協会は科学の普及活動に力を入れ、主に科学、教育の分野の友好・協力を促進している。今まで日本科学協会は日本の大学、研究機関、出版社、企業等から既に 57 万冊収集し、中国の大学には 40 万冊寄贈した。今回の訪日団の訪問により、中日図書館間の交流・協力が強化し、図書寄贈プロジェクトの発展に役立つものであった。この図書寄贈活動により中日両国の文化教育等における交流

及び協力の促進を図りたい。

代表団は日本科学協会が長期に亘った、中国の教育事業に対する関心と支持に対し感謝の意を表した。中日双方の共同の努力及び関係者の大きな支持のもとで、図書寄贈プロジェクトは大きな発展を収め、中国の大学で大きな反響があった。中国の大学の図書館の毎年の図書購入費は余り多くなく、限られた外国語版の図書しか購入できない。自分の力だけでは教育・研究の要望を十分に満すことができず、特に外国語版の図書の需要ニーズには満足できない。日本科学協会が実施している図書寄贈プロジェクトは対象図書が各分野に亘っており、大学図書館の外国語版の図書不足の深刻な問題を和らげ、大学の教育レベルを高めた。寄贈された図書は、外国の先進的な技術知識及び最新の社会発展の状況を紹介したもので、教師、学生たちの学術レベルの強化及び大学の国際化に役立った。中国の各大学から喜ばれている。寄贈図書は開架した後、活用率が高くて、教師及び学生から好評を得た。中国側の関係者はこの図書寄贈プロジェクトを非常に重視し、専任の担当者が管理している。今回の訪日により、図書寄贈プロジェクトの具体的な運営方法を考察し、日本の関係者と実務的な交流を行い、日本の先進的な経験を学んだ。中国の大学の図書館運営に大いに役立つと思う。図書寄贈プロジェクトは益々発展し、図書寄贈により中日文化教育における交流・協力が促進されることを期待している。

(二) 研究会の状況

東京での滞在期間中に、中日双方は「中日図書館情報リテラシー研究会」を開催した。日本科学協会と図書館関係者、図書寄贈協力者及び駐日本中国大使館教育処等の関係者60名あまり研究会に参加した。日本著作権協会中川舞弓専務室長が「日本の電子情報著作権について」を講演し、日本の著作権法の発展の歴史、現状、問題点、対策を詳しく紹介した。訪日団団長、黒龍江大学図書館の霍燦如館長は「中国の大学の情報リテラシー」について講演し、ここ数年来の中国の大学の情報リテラシーの確立、発展、課題及び今後の発展方向を紹介した。参加者は情報著作権、情報リテラシー等の問題についての議論が白熱した。そして、焦点の問題について各自の見識を述べた。

三、 代表団の収穫と感想

代表団は訪問先の紹介の聴取、関係業務の視察により、深く感じたのは日本の図書館は人をもとにするサービス理念ということである。早稲田大学の図書館では各閲覧室には休憩室があり、1階ではサービス区が設けられ、珈琲室、読者休憩室も

ある。館内には単独研究室があり、この中には机、コンピュータ等の施設があり、使用しやすくなっている。国立国会図書館関西館は今年10月オープンしたばかりで、建築面積は59500平方メートル、蔵書は600万冊である。読者はIDカードで自由に館内で閲覧できる。地下書庫の移動書庫にはセンサーがあり、人がいる時は電気がつき、いない時は消える。大阪府立中央図書館には目の不自由の方用の閲覧室、点字図書等を設置している。目の不自由の方のために朗読コンピュータがある。そして、点字ブロックがある。公共図書館では児童、老人のために図形の表示のコンピュータを設け、より多くの人たちがコンピュータで資料を調べられるようになっている。

訪日により、日本の図書館の現状及び発展動向が分かり、日本の図書館の建設面の優れた経験を学ぶことが出来た。日中の比較により、自分の改善すべき所を明確した。訪日団一同は、日本科学協会が実施している図書寄贈プロジェクトに大きな意義を感じた。中国の大学図書館が新しい状況のもとで発展を図っていくために重要な役割を果たした。訪日団事業は中日図書館間の友好交流と相互協力を強化し、相互理解を深化し、中国の大学の図書館が世界に向って羽ばたく大きな力になった。今後、友聯会の協力によりこのプロジェクトが長期的に発展することを希望している。

アジア部

馬 農

2002年11月6日